

大学時代の学びを活かして

仁真会 白鷺病院 薬剤科
三宅 瑞穂
(臨床薬剤学研究室 2012年3月卒業)

私は大学での病院実習において「透析患者への投薬ガイドブック」を読み、腎機能に応じた投与量設計を通じて、患者さんや医師の役に立つ薬剤師になりたいと思うようになりました。また、研究室では先生方や先輩、同級生と相談しながら試行錯誤して実験に取り組み、未知のことを調べていく研究の楽しさを知ることができました。当時教授であった田中一彦先生からは、研究は研究室内の実験だけでなく、臨床上の課題を解決するためにも行えるものであると教えていただきました。卒業後は、研究活動に力を入れている腎・尿路系の専門施設である白鷺病院に就職しました。

現在は薬剤師として、調剤、病棟業務、DI業務、TDMなどの日常業務に携わりながら、学会発表や論文投稿の機会にも恵まれています。日常業務の中では、投薬や治療の対応に悩む場面も多く、過去の情報や文献を調べながら対応しています。しかし、透析患者やCKD患者では実臨床における情報が十分でないことも少なくありません。そのため、当院での投薬内容や検査値、治療経過などの情報を収集し、研究発表につなげています。研究テーマを決めるることは研究の第一歩ですが、私自身、研究テーマを見つけることが最も苦手だと感じています。上司や同僚の協力を得ながら、研究を続けています。

今回、日本腎臓病薬物療法学会誌にレムデシビルに関する論文 [Jpn J Nephrol Pharmacother 2024; 13: 13-21] を掲載していただき、日本腎臓病薬物療法学会の優秀論文賞に選出していただきました。投稿後は査読者から多くのご指摘をいただき、修正を重ねる必要がありました。その過程で論文がより洗練されたものになったと感じています。論文が受理されたときは、完成した喜びとともに、この研究が誰かの治療選択の助けになるかもしれないと思い、大変うれしく感じました。卒業後も田中一彦先生にお会いするたびに「論文として形に残すことが大事だ」と言われてきましたが、その言葉の意味を改めて実感しています。今後も臨床上の問題に役立つ研究を続けていきたいと思っています。

今回の研究は、私一人の力ではなく、共著者である上司や同僚、査読者をはじめ多くの方々の支えによって掲載に至りました。また、卒後14年が経った今でも、加藤先生をはじめ研究室の先生方や、同級生、先輩、後輩との世代を超えた交流が、日常業務や研究活動の大きなモチベーションになっています。この原稿を書くにあたり振り返ってみると、研究室を通したつながりが大学時代だけでなく、その後の薬剤師人生にも影響を与えていていることに改めて気づかされました。

大学で学んだことや人とのつながりは、卒業後も薬剤師としての支えになります。皆さんの大学での時間が、それぞれの形で将来につながることを願っています。

